



写真は1日目の活動から。上から、東通仮設住宅町内会へ義援金贈呈式の模様。雪かきや高齢被災者のみなさんと懇談会も実施。陸上自衛隊仙台駐屯地を訪問したあと、被害の大きかった仙台市若林区荒浜に建てられた東日本大震災慰霊碑に全員で献花し黙祷を捧げた

Photos by H. Takahashi

【東日本大震災 被災地はいま……社会貢献学会が被災地支援】

■ ボランティア活動が復興への大きな支え 期待される支援継続

《Bosai Plus》特約リポーター・高橋英彦/防災士

東日本大震災から早くも1年が経過し、被災地では、被災者の生活再建や防災機能の再構築を柱とした復興計画などが進められ、復興に向けた動きは着実に前進している。また、被災地に住む高齢者や子どもたちの心の復興へ向けたボランティアらによる支援活動も活発に行われている。

このうち社会貢献学会(本部;仙台市青葉区 渡辺信英会長)では、ひょうごボランタリープラザと共催で3月24日～25日の2日間、東日本大震災の被災地である仙台市若林区東通仮設住宅、宮城県亶理町や山元町で災害支援ボランティア活動を行った。この活動は社会貢献学会が会員に向けて参加者を募り、神戸、大阪、静岡、東京、宮城、青森から市民や学生ら29名の会員が参加した。3月23日夕、神戸学院大学ポートアイランドキャンパス(神戸市中央区)を関西からの参加者19名を乗せた災害支援ボランティアバスが出発、東日本大震災の被災地である宮城県に入り、東京と東北からの参加者と合流し2日間の活動を行った。

仙台市若林区東通仮設住宅では、活動に先立ち、3月11日に青森市内で被災地支援の募金活動を行った社会貢献学会顧問・工藤 淳さん(青森県防災士会代表理事・会長)から東通仮設住宅町内会に義援金が贈呈された。東通仮設住宅では会員が、前夜から降り積もった敷地内の雪かきや高齢者との懇談など、3時間余りの活動を行った。

大橋公雄・町内会長は「この仮設には大きな被害を受けた荒浜地区の住民が生活している。夢と希望を持って復興に取り組んでいるが、みなさんの支援は心の励みになる。お見舞金は町内会のために役立てたい」と話し感激していた。

この日は、陸上自衛隊仙台駐屯地を訪問し、「東北方面隊の概要と東日本大震災の活動」について説明を受けたほか、震災直後に避難所運営にあたった学会員で防災士の菊池健一さんから当時の状況やその教訓について話を聞いた。この中で菊池さんは「平時から避難所運営のための組織づくりが大切、その基本は地域連携だ」と指摘した。また、社会貢献活動支援士で仙台市議会議員の菊地崇良さんからは仙台市復興計画について報告を受けた。菊地市議は「災害時は行政主導で動かなければ被災者の支援は遅れるばかりだ。復興計画も教訓を活かした内容で迅速に進めることが重要で、仙台市は5年で復興する予定だ」と強調した。

この後、仙台市若林区荒浜に建立された東日本大震災慰霊碑を訪れ参加者全員で献花、黙祷を捧げた。

2日目の3月25日は、宮城県亶理町のりんご園と山元町のイチゴ園の作業支援活動を行った。りんご園では剪定した小枝を集める活動を、イチゴ園では強風の中、飛ばされながらハウス周りの防草用シート敷き作業を行った。

この地域は仙台いちごの産地として有名だが、東日本大震災で津波被害を受けた山元町では117軒あった栽培農家のうち、イチゴハウスを建設し栽培を再開したのはわずか17軒で、そのほか栽培場所を町外へ移設したり、栽培をやめた農家も多いという。今回の災害支援ボランティアでは、山元町災害ボランティアセンターからの紹介で、一般家庭で塩害を受けて枯れた生垣用ヒバの株起こし作業も行った。

支援活動を行った参加者からは「被災地の方々と話しその状況を知ることが出来た。被災地支援はまだまだ必要だと感じた」、「被災地のそこだけ時間が止まっている印象を受けた。復興といってもひとくくり出来るのか。人の気持ちの復興には時間が必要ではないか」、「支援活動したお宅のご主人から笑顔で感謝され、逆に元気を貰ったような気がした」といった感想が寄せられた。

東日本大震災の被災地では、ボランティア活動が復興に向けた大きな支えとなっていることから、今後も社会貢献学会の災害支援ボランティア活動等による継続的な支援が期待されている。

[>>社会貢献学会](#)

[>>ひょうごボランタリープラザ](#)

[>>山元町社会福祉協議会](#)